

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	緒方宣挙
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第28号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第13条
学位授与の日付	令和5年3月19日
学位論文題目	「気になる子ども」への保育者の支援に関する研究
論文審査委員	主査 渡辺俊太郎（大阪総合保育大学教授・博士（心理学）） 副査 高根栄美（大阪総合保育大学准教授・修士（教育学）） 副査 松田侑子（弘前大学准教授・博士（心理学））

〔1〕 論文の概要

近年、保育現場では「気になる子ども」の保育が大きな課題となっている。これまで、「気になる子ども」をめぐるさまざまな研究が行われてきたが、保育の現場では依然として「気になる子ども」への支援に保育者が苦慮している状態が続いている。本論文は、この課題の解決に寄与するため、応用行動分析学の視点から見た保育の実態を明らかにし、応用行動分析学の保育現場での実用化に向けて検討することを目的としている。

本論文の構成は次の通りである。

第1章 本研究の背景と目的

第2章 応用行動分析学の視点から見た保育の実態

第3章 応用行動分析学の視点から見た保育者の「気になる子ども」への支援

第4章 保育現場における応用行動分析的な支援の実践及び「気になる子ども」の保育者の捉え方に関する質問紙調査

第5章 総合考察

第1章では、保育現場における「気になる子ども」への保育者の支援が一つの課題となっていることから、「気になる子ども」の保育者の支援に関する先行研究の動向を検討した（研究1）。その結果、「気になる子ども」への支援に関する研究は20件あったが、有効性が実証されている技法を取り入れた介入等の支援を保育者が行っている報告は1件のみしかなく、具体的な支援技法は明らかにならなかった。そこで、保育現場における「気になる子ども」への介入方法として取り扱われている技法や技術に関する先行研究の動向を検討した（研究2）。その結果、応用行動分析学に関する研究数が最も多くかつ定期的に

報告されていることが明らかになった。応用行動分析学は、望ましくない行動を減らすことよりも、正の強化の原理を用いて望ましい行動を増やす手続きが推奨されており、保育現場において負担感や抵抗感が少なく、実践のしやすさから、「気になる子ども」への保育者の支援として応用行動分析学が有効であると考えられた。

第2章では、応用行動分析学の視点から見た保育の実態を調査した研究はこれまでごくわずかしかなかったことから、保育現場で用いられている先行事象や結果事象の方略の実態を把握し、そこから保育の強みと課題を明らかにするために、保育者35名の行動観察を行った（研究3）。その結果、応用行動分析学の視点から見た保育の実態が明らかになり、望ましい行動に対する正の強化は保育場面による影響を受けず、一定の頻度で行われていることが示された。保育現場において、子どもの望ましくない行動を注意・叱責で減らすのではなく、望ましい行動を正の強化により増加・維持していく保育が実践されている可能性が示唆された。保育にとって、応用行動分析学は親和性の高い支援技法であると考えられた。

第3章では、保育者が子どもの「行動」をどのように捉え、どう「支援」しようとしているのかを明らかにし、「気になる子ども」への支援における応用行動分析学の視点の有効性について検討するために、研究3の保育者の中から10名に半構造化インタビューを行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った（研究4）。その結果、先行事象においては、【子どもを理解する】という現象、結果事象においては、【望ましい行動を見つけようとする意識】と【子ども観】という現象が明らかになった。先行事象と結果事象の結果を踏まえると、叱ることで望ましくない行動を減少させるのではなく、適切な支援によって望ましい行動を生起させ、ほめることで望ましい行動を増加・維持する保育が実践されていると考えられた。しかし、ほめることが好子として機能していなかったり、標的となる行動へ適切にほめを随伴できていなかったりといったほめることの課題や、自分本位な支援傾向が強かったり、望ましくない行動を叱ることで減らそうとしたりする保育者の存在も示された。保育者の行動がより適切なものになるには、応用行動分析学の視点が有効である可能性を見出した。

第4章では、保育現場における応用行動分析学の実践度、保育者の「気になる子ども」への支援の志向性の違いによる応用行動分析学の実践度への影響、「気になる子ども」の保育者の捉え方を明らかにするために、質問紙法による調査を実施した（研究5）。その結果、応用行動分析学の実践度の合計得点（270点満点）は、平均208.60（ $SD = 14.20$ ）あり、応用行動分析学的な支援が比較的实践されていることが明らかになった。「気になる子ども」への支援の志向性と応用行動分析学の実践度の関係を検討したところ、個別志向が高い保育者は応用行動分析学の実践度が高く、統制志向が高い保育者は応用行動分析学の実践度が低いことが示された。一方、「気になる子ども」の行動の原因として、本人の問題（特性や性格など）と捉えている保育者が76.1%と最も多く、保育の仕方の問題（人的・物的環境など）と捉えている保育者は7.8%しかいないことが明らかになった。また、

応用行動分析学的な支援の実践に関する質問項目の中には、応用行動分析学に基づく支援としては適切ではないと考えられる回答も確認された。これらの結果より、保育者が適切な支援を行うためには、応用行動分析学の基本的な理論を学ぶ必要性があると考えられた。

第5章では、研究3・4・5で得られた結果及び先行研究における応用行動分析学に関する研修内容から、保育現場の実態に応じた応用行動分析学の研修プログラムについて検討した。今後の課題は、保育現場に特化した応用行動分析学の研修プログラムを開発し、その効果を検証することで、より有効な研修プログラムになるように改良していくことである。

〔2〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究業績を踏まえた集大成であると認められる点については、小学校教諭として「気になる子ども」たちに対して応用行動分析学の視点を生かした支援に取り組んできた中から生じた問題意識を出発点とし、保育現場における「気になる子ども」への支援について文献研究、観察研究、インタビュー調査、質問紙調査と研究を積み重ね、博士学位請求論文としてまとめることができたことは評価に値する。

なお、本論文の第1章、第2章、第3章は、下記の雑誌等に公刊された内容が含まれているが、本論文執筆にあたり、加筆修正を加えたものである。

緒方宣挙. (2020). 「気になる子ども」への保育者の対応に関する研究の動向. 大阪総合保育大学紀要, 14, 69-84.

緒方宣挙. (2021). 日本の保育現場における「気になる子ども」への介入技法に関する研究の動向. 大阪総合保育大学紀要, 15, 51-66.

緒方宣挙. (2022). 応用行動分析学による保育者の行動の分析ー設定保育場面と自由遊び場面に着目してー. 大阪総合保育大学紀要, 16, 79-88.

緒方宣挙. (2023). 保育者による子どもの「気になる行動」への応用行動分析学の視点を踏まえた支援の有効性. 大阪総合保育大学紀要, 17, 103-119.

第二の独創性については、まず、「気になる子ども」での支援について、保育現場で用いられている先行事象や結果事象の方略の実態を明らかにすることができたことが挙げられる。これまでの保育現場における応用行動分析学の研究は、研修やプログラムの効果の検証や開発が中心であり、応用行動分析学の視点から見た保育の実態を調査した研究はわずかしかなかった。本研究は保育者の観察やインタビューを通して応用行動分析学が保育に親和性の高い支援技法であり、実際にも応用行動分析学の理論に合致した支援が行われていることを見出した点に意義が認められる。

一方で、観察やインタビューでは保育者が子どもを適切にほめることができていない場

面もあることや、自分本位な支援傾向が強い保育者、望ましくない行動を注意・叱責によって減らそうとする保育者の存在といった課題も見出された。応用行動分析学は保育に親和性の高い支援技法ではあるものの、理論自体は保育者にほとんど広がっていない。応用行動分析学の視点から検討することで保育者の支援がより適切なものになる可能性があり、応用行動分析学の視点の有効性を示した点も意義深い。

また、質問紙調査によって、保育者の支援の志向性によって応用行動分析学の実践度に違いがみられること、保育者は気になる行動の原因を子ども本人の問題と捉えがちであることを明らかにし、研修プログラムにおいて扱うべき内容や留意点を見出して、保育者のエンパワーメントや質の高い保育につなげるための示唆を得ている点も評価に値する。

第三の申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであることについては、これまで「気になる子ども」をめぐるさまざまな研究が行われてきたが、保育の現場では依然として「気になる子ども」への支援に保育者が苦慮している状態が続いているという課題に対して、応用行動分析学の視点が有効である可能性を見出したことの意義は大きい。単に保育現場に応用行動分析学を導入するということではなく、応用行動分析学の視点から保育現場の実態を明らかにすることを通してその強みと課題を示し、「気になる子ども」の保育の質の向上に資することを追求している。子どもの行動を子ども本人とその子どもを取り巻く環境の相互作用から捉えられるように、ABCの枠組みを理解すること、とくに望ましい行動に対する正の強化についての理解を深め、効果的なほめ方を体现できるようにすること、保育者の志向性や動機づけに留意したプログラムの構成や進行を検討することが必要であるといった本研究において得られた知見をもとに、効果的な研修が開発されることが期待できる。

第四の学際性については、本論文の主眼は保育現場における「気になる子ども」の支援に資することに置かれているが、有効な視点として示されている応用行動分析学は心理学者であるB.F.スキナーが体系化した行動分析学を基にしている。その支援技法を保育に取り入れるにあたり、保育の実態に関する分析結果を踏まえた上で結論を導いている点は、学際性の高い研究姿勢であるといえるだろう。得られた知見は保育に留まらず、学校教育や特別支援教育にも寄与する知見を提供していると考えられる点も、学際性を認めることができる。

第五の本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと認められることについては、本論文は「気になる子ども」への支援に関して、応用行動分析学の視点を生かすことで質の高い保育につなげることを目指した研究であり、得られた知見は保育者の実践の向上、保育学・教育学への寄与が期待できるものである。よって、本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと考えられる。

以上のように、本論文は高く評価すべき点を豊かに備えているが、論文の公開審査の過程で審査委員から指摘された課題について、主なものを記すことにする。

第一に、本論文では「気になる子ども」の支援において応用行動分析学の視点が有効で

あることを示してはいるものの、実際の保育現場での支援体制にどうつなげていくかは明示されていない点がある。「気になる子ども」が在籍するクラスでは担任も含めた複数の保育者で保育を担っていることが多く、そのチームワークの中で本論文で得られた知見をどう生かしていくか、現在の「気になる子ども」の保育がどのように形成されてきたのかも踏まえながら、検討することが必要であろう。

第二に、第4章において、質問紙調査で測定した変数を選択した理由が十分に説明されていない点がある。論文の流れとしては、第2章、第3章の研究において示された「気になる子ども」の保育における課題について、先行研究を踏まえた上で保育者の志向性や「気になる子ども」の捉え方が関連しているのではないかという推測のもとに変数を設定したと考えられるものの、より明確な記述が必要であろう。

第三に、本論文では応用行動分析学における望ましい行動に対する正の強化を主に取り上げているが、同じく応用行動分析学における望ましくない行動の減少を目指す支援技法については言及が少ない点が挙げられる。ほめることを中心とした望ましい行動に対する正の強化の方が保育に親和性が高く、望ましい行動を増やすことが結果的に望ましくない行動の減少にもつながると考えられるためであろうが、今後望ましくない行動の減少についても検討することで、さらに効果的な支援の提言につながることを期待される。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる課題を列举した。たしかに本論文にはいくつかの課題が含まれているが、総合的に見て本論文において得られた知見が「気になる子ども」の保育実践に資する可能性を否定するものではなく、今後の研究の進展に対する期待につながるものと考えられる。

以上の審査結果より、本論文は、博士（教育学）の授与にふさわしいと論文審査委員全員一致で判断した。